

第4回経営シンポジウム

「ウィリアム・ホガース —— 18世紀イギリスの社会と道徳を描く ——」

森 洋子 明治大学教授

2005.12.3

目 次

第I部 ホガース、過去と現代

1. 日本でのホガース研究
2. イギリスでのホガースの人気
3. ホガースの環境(ロンドン)

第II部 ホガースの作品論

1. 初期の版画
2. 《娼婦一代記》
3. 《放蕩息子一代記》
4. 《当世風結婚》
5. 社会世相を描く

まとめ

- (1. 天才的な人間描写、2. “描かれた道徳”、3. 画中画の活用、
4. 外国人嫌い、5. 社会正義派ホガース、6. 時事問題を主題、
7. 虐げられた子供たち、8. ホガース法)

司会 経営研究所主催によります、ホガース版画展。昨日に続きまして、講演会を始めさせていただきます。講演会の司会を務めます、経営学部の白坂でございます。

本日の講演は、明治大学より森洋子先生において願いました。講演に先立ちまして、森洋子先生の簡単な紹介をさせていただいてから、講演いただくということになっております。

森洋子先生。新潟県のご出身で、お茶の水女子大学哲学科を卒業されました。その後ドイツのミュンヘン大学、アメリカのプリンマー大学・大学院、ベルギーの王立図書館での研究も含め、約6年間、欧米に留学し、西洋美術史を専攻されました。主な研究の対象は16世紀フランドルの画家ピーテル・ブリューゲルと、本日講演いただく18世紀イギリスの画家ウィリアム・ホガースです。美術にあまり造詣が深くない私などでも、ブリューゲルの《バベルの塔》とか《雪中の狩人》という有名な絵は見たことがあると思います。ブリューゲルはベルギーで非常に有名な画家でございます。

16世紀から17世紀にかけてのフランドル、オランダ美術を研究されておられる森洋子先生は、18世紀のホガースについても、『ホガースの銅版画』（岩崎美術社）のご著者でもあります。今日お手元にあります近著『子供とカップルの美術史』（NHK ブックス）のなかでは、「ホガースの“描かれた道徳”と子供観」という章を設けられています。それでは森先生、どうぞよろしくお願いたします。

森 ただいまご紹介いただきました明治大学の森です。このたびは大東文化大学経営シンポジウムにお招きいただきまして、光栄に存じます。とくに大河内暁男先生の大変貴重なコレクションである、ホガースの版画をこのように一堂に会して見られるということは、会場の皆様だけではなく、私にとっても素晴らしい研究の機会と思い、昨日の夕方も今朝も、ゆっくりと拝見させていただきました。展覧会を開催していただきました大東文化大学と大河内先生に心からお礼を申し上げます。

第1部 ホガース、過去と現代

1. 日本でのホガース研究

ホガースの版画を見るには、ロンドンの大英博物館の Study Room of Prints and Drawings に行かなければならないのですが、前もって、電話とかあるいは手紙などで、何月何日に行きますというアポイントメントを取るのが普通です。コレクションのある大きな一室に着いても、何と何を見たいと申し出てから、かなり、待たされます。大きなケースに入った版画を1点1点、調べ、また別のケースを出してもらい、といった具合に、本当に数日がかかります。この大東文化大学の会場では、壁にかけられた60点あまりの作品を自分のペースでゆっくりと見られるのですから、夢のようです。

今回、大河内先生が版画展のカタログを作られ、個々の作品について解説をされ、また展示してある版画作品の下にも同じテキストが貼られ、こうした教育的な配慮に、心から敬意を表します。日本ではホガースだけの展覧会がほとんど企画されたことがなく、私の記憶する限り、1970年代に六本木のポール・ギャラリーで小規模な展覧会があっただけです。過去に「イギリスのカリカチュア」といった展覧会はありましたが、ホガースだけと

いう展覧会は大東文化大学が初めてではないでしょうか。

しかしホガスについては、すでに明治時代、夏目漱石が『文学評論』（1910年）で紹介しています。漱石はロンドンに留学したときに（1900～03年）、ホガス芸術に興味を持ち、帰国してから東大で英文学史の講義をしながら、18世紀英文学とホガス版画との関係に触れています。昭和では、英文学者の櫻庭信之先生がホガス研究をされ、『ホガス論考』（1964年）を出版されています。しかし日本の美術史家たちはホガス芸術にこれだけの素晴らしい描写力、表現力があり、ドラマティックな内容があるのに、彼に関してこれまであまり研究しておらないのです。日本ではいまだ認知度も低く、世界美術全集でも『ホガス』という巻はまだ出版されていません。私が『ホガス版画』（1981年）を著したのも、ホガスが私の専門であるブリューゲルの版画から影響を受けたのではと考えたからです。確かに、人間の弱点や道徳的な問題、社会でのさまざまな矛盾や悪習を視覚に訴えるといった点で、ホガスはブリューゲル版画から刺激を受けているといえるでしょう。

2. イギリスでのホガスの人気

ところでイギリス人とホガスの話をすると、延々話が弾むのです。今年5月、東京でケンブリッジのペンブルック・カレッジの建築学科教授夫妻をご案内しました。そのとき、わたしがホガスを研究していると話をしましたら、お二人は目を輝かせてホガス関係の最近のニュースを伝えてくださいました。それは2004年ロンドンのブルンスヴィック・スクエア（Brunswick Square）に開館したばかりのThe Foundling Museumという捨て子博物館のことで（図4）。ホガス夫妻には子供はいませんでした。捨て子養育院の創設者コーラム船長（Captain Thomas Coram）に協力して、彼は理事や寄宿舎の監督官となり、多額の寄付をし、資金集めのための富くじの景品となる作品を寄贈したりしています。養育院は1739年にイギリス王ジョージ2世から「棄児扶養・教育院」の認可を受けましたが、社会主義政策に力を入れたイギリスでの捨て子養育院の歴史などを、この博物館で見られます。このことは後でもう一度お話ししましょう。

イギリス人たちと話をしていると、いつも感じるのですが、ホガスは今日、国民から最も関心をもたれる画家の一人ですね。イギリスでお友だちができたなら、ぜひホガスを話題にしてください。皆さんの教養の高さとかイギリス社会への理解の深さなどで、とても評価されると思います。

ロンドンのソーン美術館（Sir John Soane's Museum）は、建築家ジョン・ソーン卿の邸宅を公開したものです。そこに後にお話するホガスの8点からなる油彩画の連作《放蕩息子一代記》があります。私がミュンヘンに留学していたとき、ロンドンを訪れ、ソーン美術館にホガスを見に行きました。そのとき、若いお母さんが小学生ぐらいの2人の子供にどのように1人の息子が親の莫大な財産を蕩尽し、転落した人生を歩むかをとても丁寧に説明していました。子供の教育に現代でもこうやってホガスがとりあげられることに感銘しました。

イギリス人気質といえますと、一般に、観察力、批評精神、ユーモアの三つがあげられますが、作品の中にそれらを表現したホガスは今日まで、イギリスの人びとに共感をもつ

て愛されているのでしょう。というのも、歴史的にみて、ホガースはイギリスで最初の国民画家とあっていい存在でした。ホガース以前、たとえば16世紀のヘンリー8世の時代では、ドイツ人画家ハンス・ホルバインが宮廷画家として肖像画の制作に従事していました。ヘンリー8世自身だけでなく、6人の王妃たちの肖像を手がけたのもホルバインでした。17世紀になりますと、フランドル人画家アントニ・ヴァン・ダイクがチャールズ1世からとても厚遇され、宮殿のような豪華な住まいを与えられ、肖像画家として、大活躍しました。彼はなかなか本国に帰れず、病気をすればすぐに最高の医者が治療に専念してくれるといった状況でした。

その意味で、過去において外国人画家に牛耳られていたイギリスの画壇がようやく、イギリスの社会と道徳を描くホガースによって脚光を浴びるようになったのです。今日、イギリスでホガースが評価されるにはこのような歴史的な背景があったのです。とりわけ、ホガースの版画は“読む版画”といわれますが、当時の政治、社会、家庭生活、人々の文化的な趣向などが、ひじょうに詳細に描写されています。その作品には18世紀にロンドンで発行された『タトラ』という週三回刊の雑誌や『スペクテイター』という日刊のエッセー集ペーパーで報道された事件をビジュアル的に解説、批評しているといった時事的な要素が濃いのです。ホガースが当時の人々からだけでなく、現代人からも興味を持たれているのは、彼の描く世界が現代人の直面する問題と共通する側面があるからでしょう。たとえば道徳の腐敗、アルコール中毒、不幸なホームレス・チルドレン、外国文化の偏愛と自国の伝統の軽視といったテーマを列挙するだけで、皆さまも何かを思い当たれることがあるのではと思います。

ホガースの芸術は「描かれた道徳」painted morals だといわれます。この表現はホガースと親しかった劇作家で俳優デビッド・ギャリック (David Garrick) がホガースの墓碑に書いたもので、ひじょうに適切な言葉といえるでしょう。ちなみにホガースはシェイクスピアの『リチャード3世』の主演を演じるギャリックの肖像画を制作しました。

3. ホガースの環境(ロンドン)

これから作品の解説を始めるまえに、少し、ホガースの生きた環境について親しんでいただきたいと思います。彼は1697年にロンドンで生まれ、生涯、この都市で活躍しましたが、現在でも彼と関連のある場所を訪れることができます。

ホガースの《自画像》(1748/49年、図1)が版画化された作品を見ていただきましょう。彼はまず、油彩で愛犬トランプと一緒に自画像を制作しました。それは自分の版画集の口絵に載せるためです。今回、大東文化大学から皆さまに配布されたカタログの62ページにこの肖像版画があります。画面前景のパレットに一本の曲線が引かれ、Line of Beauty (美の線) と書かれていることに注目してください。ホガースが考える「美の線」とは人体のラインとか動物の背骨、足とか人間の筋肉または顔などを形づくっている蛇状曲線を意味しています。彼は1753年、ヨーロッパの美学史上、最初の論文といわれる *Analysis of Beauty* (『美の分析』) を出版しますが、「美の線」はこの著書の基本概念のひとつでありました。

ロンドンにあるセント・バーソロミュ・ザ・グレート (St. Bartholomew the Great)

(図2)は1123年に建立されたロマネスク様式の聖堂ですが、ここでホガースは洗礼を受け、父が埋葬されました。つぎの写真のセイント・ジョーンズ・ゲイト (St. John's Gate) はホガースの父がコーヒー店を経営し、破産した界隈です。当時、コーヒー店は大変、人気があり、コーヒーを飲むこと自体、モダンな生活スタイルだったのです。ロンドンでは2000軒から3000軒のコーヒー店がありました。ここは個人のオフィス代わりに使われ、商談なども行われました。『スペクテイター』を始め、各種の新聞や週刊誌などがコーヒー店で読めますし、文学者たちもここに集まり、議論を交わしたといわれています。ホガースの父リチャード・ホガースはもともと古典語の学校教師だったのですが、ギリシャ、ラテン語の入門書を著した学者でもありました。しかしラテン語専用のコーヒー店を開業したため、経営に失敗してしまいました。

この作品はリチャード・ウィルソンが描いた1746年、つまり創設時の捨て子養育院の外観です(図3)。正式名はザ・ファウンドリング・ホスピタル (The Foundling Hospital) ですが、この時代でも1500人ぐらいの子供が収容されました。18世紀のホガースの時代に出版された『ジョンソン博士の辞書』*Dr. Johnson's Dictionary* で“foundling”という言葉を引きますと、a child found without any parent or owner、(親あるいは保護者なしで発見された子供)と書かれていますが、要するに捨てられた子供を意味しています。ほかに a child exposed to chance という説明もありますが、当時の状況から「発見されるチャンスをお願いつつ公共の場に捨てられた子供」という意味なのでしょう。長年船乗りをしてイギリスに帰ってきたコーラム船長が遺棄された乳児を救うために、1741年に捨て子養育院を創設しました。収容されるのは健康な2ヶ月以下の乳児で、理事たちは子供が伝染病に罹っていないか慎重に検査しました。さらに子供の母親が収容許可の結果を待たず、勝手に子供を置いていかないように、入り口で門番が見張っていました。許可された乳児はすぐに田舎の乳母の許に預けられますが、通常、3歳から6歳で養育院に戻りますが、家庭環境が悪く、その前に死亡する子供も多かったようです。無事に養育院で教育された子供たちは10歳になると、男の子は水夫や兵士の見習いになるか、靴修理、肉屋、鍛冶屋の従弟の修業に出たり、女の子は大半、お屋敷の奉公人になりました。

ホガースが描いた油彩画《ファラオの王女のもとに連れられる幼児モーゼ》(図5)はまさにこの養育院に相応しい主題といえるでしょう。『旧約聖書』の「出エジプト記」によると、ファラオが殺害を企んだにもかかわらず、奇跡的に命が助かった幼児モーゼは心の優しいファラオの王女が雇ってくれた乳母に育てられます。この乳母は実はモーゼの実母だったのです。母の帯をしっかりと掴んでいる愛らしいモーゼを見て、捨て子養育院の子供たちはいつかこのように母に会えることを願ったにちがいません。

公的な美術館やギャラリーがなかった時代、ホガースはこの養育院の一角に同時代の若い芸術家たちの展覧会を企画し、彼らが新しい顧客を見出すチャンスを与えたのです。しかし展示された作品はすべて養育院に寄贈されました。

ホガースは1749年、ロンドンの郊外チジックに夏用の別荘(市内からテムズ川をボートで移動)を買い、『美の分析』などを執筆し、制作活動にも積極的に取り組みますが、絵の売れ行きはあまりよくありませんでした。この家は現在、ホガース・ハウスとして公

開されていますが（図6）、彼に関する様々なドキュメントを見ることができます。彼が病死して、埋葬されたのはチジックのセント・ニコラウス聖堂の墓地です（図7）。

第Ⅱ部 ホガースの作品論

1. 初期の版画

《南海泡沫事件》South Sea Scheme（1721年、図8）この版画はホガースの出世作となった作品で、具体的な社会的、経済的な事件を主題にしています。ホガースが今後、時事的な話題を版画作品で発表する方向を決めたといっただけでよいでしょう。政府保証の南海会社が設立されたのですが、この会社はスペイン領アメリカと太平洋諸島との貿易、つまり奴隷貿易に関する独占権を与えられました。したがって会社の株は大変な人気となり、1720年1月に128.5ポンド、3月になると330ポンド、7月には1000ポンドというふうに急騰し、大変なバブル現象を生んだのです。ところがそれを契機に有名無実のペーパーカンパニーが乱立したため、政府と南海会社とが建議をして、「泡沫会社取締令」が發布しました。そのため人々の投機熱が急速に冷めてしまい、1000ポンドまで上がった株価が124ポンドに急落しました。その結果、財産を株に投資した数千の人々はその下落によって、破産、自殺、逃亡するなど、非常にショッキングな社会問題が起きました。ホガースはこうした悲惨な状況を視覚的にはあまり深刻ではなく、ユーモラスに描いています。つまり投機熱に浮かれた連中、つまりスコットランドの貴族のジョン・ローを始め、書記、牧師、靴磨き、老女、娼婦などをメリーゴランドに乗せているのです。また前景に車輪刑に処され、折檻を受けた罪人のために牧師が祈りを捧げています。車輪にあるアルファベットのDは「正直」、罪人の頭部のGは「エゴイズム」なので、彼は自分の利益のために不正を行い、処罰を受けています。背景に「夫選びの富くじはここ」と書かれた看板があり、大勢の女たちがその建物の入り口に向かって殺到しています。彼女たちは夫選びも一種の投機と考えたのでしょう。このように画面全体に人間の行為にみられる、さまざまな利欲と野心が寓意化されているのです。

《仮装舞踏会とオペラ》Masquerade and Opera（1723/24年、図9）

ホガースはこの一点ものの版画を自費で発行しました。着飾ったイギリス人貴族たちがスイス人興業師の企画する真夜中の仮装舞踏会や道化師ファウスト博士のパントマイムを見ようと、それぞれの会場前で大変な行列を作っています。彼らに向かってくず屋さんがwaste paper for shop と大声をあげていますが、なんとその手押し車にはシェイクスピア、ドライデン、ベン・ジョンソン、コングリーヴというイギリスの文豪たちの作品が放りこまれています。それに反してイタリア・オペラの大広告が窓から下がっています。このようにホガースは同国人が自国の偉大な文学を顧みず、外国文化に偏愛している様子进行をかなり手厳しく諷刺しています。

また中景にピカデリー通りにあったバーリントン卿の居館が描かれていますが、ファッサードにホガースはアイロニカルに「アカデミー・オブ・アーツ」と記しました。さらにその破風の頂点に宮廷の寵愛を受けたウィリアム・ケント画伯の彫像、その下にはイタリア・ルネサンスの巨匠ミケランジェロとラファエロの座像を位置づけました。これもホガー

スの諷刺的な意図だったのです。バーリントン卿は自邸の広間の天井画を最初は後のホガースの義父ソーニル卿に依頼しながら、後にキャンセルして、ケント画伯を起用しました。ホガース自身、後の1734年、バーリントン卿と訴訟事件を起こしますが、元来、同卿やケント画伯を個人的に嫌いだったのです。

ではホガースの代表作となる3大連作版画についてお話ししましょう。これらの作品を見て、きっと皆様が感嘆されることは、ホガースの描く人物がまるでステージの上の役者のように、性格描写に強い個性をもっていて、しかも状況に応じた表情が豊かであること、さらに身振りもドラマティックである点です。彼自身、「私の人物は舞台の上の役者である」と述べています。画中画の役割ですが、一見、壁に掛けられた、脇役的な存在でありながら、主題を十分に補佐しています。それだけでなく、ホガースが古今の名画をどんなにか通曉していたかを物語っています。こうした表現力は若いころからのホガースの自己訓練の結果生まれたものでしょう。彼は町を歩きながら、特色のある顔に出会うと、すぐ親指の上にスケッチをしたと言われてます。劇場に行つて役者の表情や仕草を見たときも同様でした。

2. 《娼婦一代記》A Harlot's Progress (1732年)

ホガースは版画を販売するとき、まず油彩画で描き、それを店のショーウィンドに飾りました。それから版画の発行を新聞広告し、購入者に版画の予約申し込み票を発行したのです。代金の半額が前払い、出来上がったとき、残額と引き換えに版画を手渡すという、着実な商法をとりました。《娼婦一代記》は6点のセットでしたが、予約申し込み票は《自然の女神を覗き見る童子(プットー)》(図10)という主題です。「自然」Nature ネイチャーというのはランドスケープの自然ではなくて、ホガースは人間の本質、社会のあり方などを意図していました。童子(プットー)が女神像のスカートからのぞくというちょっとユーモラスな行為は、この連作で社会の問題を暴きだすという意味だったのでしょうか。しかしやはり多少評判が悪かったのでしょうか、別の作品の予約申し込み券として利用したときは、ホガースはこの部分の構図を変更し、童子が《自然》の女神をキャンヴァスで描くというモチーフに変えました。

第1景「女術に騙されるモル」(図11)。場面はロンドンの街角です。ロンドンと田舎を結ぶ交通事情がよくなったので、都会に憧れて田舎から出てくる青年男女が急増したといわれます。なかには家出をする娘もいたのですが、この情景は無垢な娘が売春宿の女術の罠にかかった瞬間を描いています。この中年女は実在の人物マダム・ニーダムと推定されています。印刷された版画ではよく分かりませんが、大河内コレクションを拝見すると、この女術は娘を安心させるために実に優しい表情をしていて、都会でのこれからの生活を不安に思っている娘に、「心配しないで、私がよい就職口を探してあげるから」などと親切的な言葉をかけて騙しているのでしょうか。このような女術を雇っているのはチャタリス(Charteris)という売春宿の主人ですが、彼は《ベル亭》(実在しました)の前で、二人のやり取りを注視しています。この段階では娘の名前は分かりませんが、樽の側にあるトランクにMHと記されているので、Mというイニシャルはデフォーの小説『モル・フランダース』の娼婦モル(Moll)、Hについてはロンドンの悪名高いケイト・ハッカバウト(Kate

Hackabout) という娼婦が連想されます。実際、この連作の最終場面で出てくる娘のお棺にはM. ハッカバウトと刻まれています。ではここでは娘を仮にモルと名づけることにしましょう。

美術的に注目したいのは、「街角での2人の女たちの出会い」とテーマがキリスト教美術での《ご訪問》(図12)と結びついていることです。処女マリアは従姉エリザベスとお互いに妊娠したことを喜び合い、マリアは精霊の力で純潔にしてイエスを身ごもり、エリザベスは洗礼者ヨハネの母となるのですが、ホガスはこの図像をパロディー化しているといえるでしょう。

第2景「ユダヤ人の愛人となるモル」(図13)。モルが紹介された仕事というのは、なんとお金持のユダヤ人の愛人になることでした。囲われたアパートの一室は悪趣味そのもので、ごてごてと飾りたてられています。モルは召使女、黒人の小姓、愛玩用の猿などを与えられました。しかし中年の男に興味をもたないモルはすぐに自分と年相応の若い恋人をつくり、2人で仮装舞踏会に行き、自分のところでいっしょに一夜を過ごしました。ところが主人は彼女の様子の変だと思ったのでしょうか、朝早くモルのアパートを訪ねたので、当然、娘の恋人と鉢合わせすることになります。そこでモルは不機嫌を装ってテーブルを乱暴に蹴飛ばし、主人の気をそらします。テーブルのお茶碗は割れ、大騒ぎになります。実はこのどさくさにまぎれ、召使女は娘の恋人をそっと戸口から出したのです。主人の驚いた顔と逃げ腰の猿の顔とがそっくりなもの、心憎いパロディーの手法ですね。

同じ情景のこの図版(図14)は構図が左右逆という以外、今、ご説明した「ユダヤ人の愛人となるモル」とほとんど似ていますが、よくみると、表情や顔つきなどまったく異なっています。実はこれはホガス版画の海賊版なのです。オリジナルではあどけなさを残している、愛くるしいモルの顔は海賊版では冷たい表情の娘になっています。ホガスの版画はすでに海賊版がでるほど、人気が高くなったのでしょうか。当然、激怒したホガスは後にホガス法といわれる「銅版画家のための著作権法」を議会で提案します。このことは後で触れたいと思います。

第3景「逮捕されるモル」(図15)。結局、モルは主人に追い出され、ドルリー・レインというスラム街の貧しいアパートに住み、生活のため、娼婦になります。そんなある日、彼女のアパートにロンドンでも腕利きの娼婦狩り刑事ゴンソンが乗り込んできます。客を泊めた証拠は十分でした。ジェームズ・ドールトンという辻強盗も彼女の客の一人であったことは、彼の鬘箱がベッドの上に置かれています。ドールトンは1730年、タイバーンで処刑されました。

第4景「強制労働の日々」(図16)。モルは召使女といっしょに強制収容所、つまり一種の矯正院で労働するという処罰を受けます。色々な娼婦がありますが、彼女たちは麻を打つ仕事などをさせられています。ある娼婦は早く出獄できるように、看守人にウインクし、靴下をはきながら、肌を見せるなどして、誘惑をしています。後ろの壁に手枷をさせられた男がいますが、おそらく真面目に労働しなかったからでしょう。板には「このように立つよりは働いた方がまし」と書かれています。

収容所はかなり老朽化し、内部の衛生状態もひどく悪いのですが、それは天井からの雨

漏り、ノミを捕る女の様子から伺えます。こうした状況はホガスによって、意図的に描写されています。彼はここで強制的に働かされている人間たちがいかに非人道的な扱いを受けているかを画面で訴えようとしているのです。

第5景「瀕死のモル」(図17)。娼婦たちが一番かかりやすい病気は梅毒でしたが、モルも感染してしまいます。彼女の召使でさえも梅毒で鼻が欠けていますが、まだ働けます。しかしモルはかなり重病に陥ってしまいました。彼女には父親の分からない子供が1人いますが、ここでは誰もこの子供に食べさせてくれません。彼は一人で暖炉のそばに座り、鍋が温まるのを待ちながら、シラミ頭をかいています。モルは瀕死の状態となったため、召使女があわてて医者を呼びますが、娼婦たちを相手にする医者はかなりいかがわしい存在です。彼らは患者さんを診ないで、薬の効能書きを自慢しているのですから、自分のプライドのほうを大事にしているとしか思えません。娼婦に部屋を貸している下宿のおばさんはモルからもう家賃も取れないかもしれないと、彼女の持ち物から金目のものを探しています。

第6景「モルの葬儀」(図18)。ついにモルの葬式の日がきます。彼女のお棺には M. Hackabout Died Sept 2d.1731 Aged 23 (M.ハッカバウト没。1731年9月2日、享年23歳)と記されています。ここではじめて、モルの名前がハッカバウトであることが明らかにされます。娼婦の仲間たちはお悔やみに訪れるのですが、その態度はきわめて不謹慎そのものです。鏡に向かってお化粧をしたり、司祭とふざけ合ったりしています。モルの子供は喪服を着せられているものの、独楽に糸を掛けて、無心に遊んでいます。幼すぎてまだ母親の死を理解できないのでしょう。印刷ですとそれほどハッキリ分からないのですが、大東文化大学のこの会場でオリジナルの版画で見ると、子供が嬉しそうな表情をしているので、とても不憫に思われます。ホガスはこの場面を描きながら、この子供の不安な将来を見る者に訴えたいと思っているのでしょう。

3. 《放蕩息子一代記》A Rake's Progress (1735年)

第1景「遺産を相続するトム」(図19)。《娼婦一代記》は若い女性の悲劇的な話でしたが、今度は若い男性の転落物語です。トム・レイクウェル (Tom Rakewell) という高利貸しの息子がオックスフォード大学に遊学し、下宿屋の娘さんといいい仲になります。ホガスの母も父が下宿したときの娘だったので、そうした状況が伏線にあったのでしょう。

さて遊学中に主人公トムの父親が急死し、彼はロンドンに呼び戻されます。家では葬式の準備のため黒幕などが張られ、トムは仕立屋に服を注文します。高利貸しだった父が隠していたお金がいろいろな場所からバラバラと出てきます。何でも捨てられない性分か、古い髪などもたくさん納戸に置かれています。執事は金をくすねながら、亡き主人の財産の計算をしています。

そんな最中にオックスフォードから下宿屋の娘が母親と一緒にトムの家にやってきます。母親が激怒しているのは、トムと結婚を約束した娘が妊娠し、お腹も大きくなっているのに、トムは彼女を引きとらないからでしょう。トムは当惑しながら、娘にひとつかみの金貨を渡し、追い返してしまうのです。

第2景「トムの取り巻き連中」(図20)。葬儀も終わりましたが、トムはかなりの財産を

相続しました。おしゃれな洋服を着た彼のところに、いろいろな取り巻き連中が訪れています。彼らの名前も想像できます。小さなバイオリンを持ったダンスの先生はエセックス、庭園の設計図を持ってきた庭園師はブリッジマン、フェンシングの先生はデュボワなどです。

前景でピアノの弾いているのはヘンデルですが、彼は後にホガースたちの創設した捨て子養育院のために、礼拝堂で演奏したり、指揮をとるチャリティーコンサートを開き、多額の資金集めをしてくれました。ヘンデルはロンドンでは人気の高い外国人音楽家だったのです。彼の譜面台の巻紙には当時、評判のイタリア・オペラの去勢歌手ファリネッリへの贈り物のリストがありました。去勢歌手というのは子供のときに去勢されたため、少年の音色で非常に魅力的な女性の高い声を出す男性歌手のことでした。カストラートと呼ばれました。

ここで画中画の役割について具体的に述べてみましょう。壁には「パリスの王子」を主題とする絵がありますが、これはギリシャ神話からの話で、王子がアフロディーテ、アテナ、ヘラから一人の女神を選ぶこととなります。結局、パリスがアフロディーテを選んだのですが、それはアフロディーテが彼に世界で一番美しい女性であるトロイのヘレナを妻に与えると約束したからです。この神話を現実の話に反映させ、トムがこのダンス教師、庭園師、フェンシングの達人の3人から一人を選ぶということになるわけです。

第3景「放蕩するトム」(図21)。トムは結局、父からの遺産を蕩尽してしまいます。彼は酒場で女たちに囲まれ、酒浸りです。壁に飾られている絵は古代ローマ時代の皇帝たちの彫像ですが、彼らのほとんどが壊されています。しかし顔がきちんと残っているのが悪名高いネロとポンタックのみです。つまりこの二人の皇帝たちのみがこの悪徳酒場で敬われているのでしょう。ここでちょっと注目いただきたいのは、こうした酒場でのお決まりの手口が見られることです。トムに接客している女が彼のポケットから懐中時計をこっそり失敬します。当時、懐中時計は非常に高価だったので、娼婦たちにとって格好の獲物だったのですが、相手に疑われないように仲間に手渡しています。その時計の針は3時をさしていますが、トムはいかがわしい酒場で真夜中をかなり過ぎた時間まで飲んでいたことが分かります。

ここで16世紀前半に活躍した「ブラウンシュヴァイクのモノグラムの画家」といわれるネーデルラントの画家の《放蕩息子》(図22)をご紹介します。主題は「ルカによる福音書」の「放蕩息子」(15章)からのエピソードですが、ここでも売春宿で女たちに酒を振る舞い、調子に乗っている放蕩息子の姿が見られます。客の中にはすでに娼婦と交渉が決まって二人で階上の密室に向かうものもいます。聖書で一番、大切な情景は罪を改悛して、父の許に帰宅する息子の姿なのですが、この時代では娼婦たちと酒宴を楽しむ放蕩息子の情景が流行しました。つまり北方ルネサンスの世界では、罪の改悛よりも教訓性の強い風俗画的情景を好みましたが、その意味でホガースはネーデルラント的な図像の伝統に啓発されたといえるでしょう。

第4景「逮捕されるトム」(図23)。トムは放逸の日々を過ごし、ついに破産して、債務者として追われる身になります。彼が人力車でウエストミンスターのセント・ジェーム

ズ宮殿通りを歩き、その街角で降りたところ、彼を探していた執行吏に遭遇します。その時、トムに棄てられた下宿屋の娘サラ・ヤング (Sarah Young) が現れ、お針子として貯めたお金をトムに「借金返済の一部に使ってね」と差し出すのです。彼女は彼から受けた非情な仕打ちを忘れて、困窮しているトムを助けようとしたのです。トムにとって彼女との再会および執行吏の不意の出現はダブル・サプライズになるわけですが、その表情は実に迫真的です。17世紀末のクロード・ジロの絵 (図24) でも、パリの街で鉢合わせをした御者同士が描かれています。この構図はおそらくジロがホガースにインスピレーションを与えたかもしれません。他方、浮浪児がどさくさにまぎれ、トムのステッキを盗もうとしています。この男の子はすでに紳士たちから盗んだステッキを2本、籠に入れてあります。親から十分に躰けられてない貧しい家の子供は善悪も知らず、こうした犯罪を平気で犯しているのです。あるいは親から棄てられた子供たちにとって“盗み”も生きるための手段なのかもしれません。実はこの版画の連作は後に再版されていますが、そのとき、この男の子の部分が削られ、歩道に座ってギャンブルする悪童たちの情景に変更されます (図25)。子供の一人は胸に入れ墨のまねをしています。彼らはえんどう豆とか小石などで賭けているようです。通常、彼らは靴磨き、リキュールの物売り、新聞売りなどをしているのでしょう。いずれにせよ、ホガースは社会から見捨てられた子供たちの憂うべき実態を版画というメディアを通じて訴えようとしたのでしょう。後の版では執行吏に逮捕される瞬間、空から稲妻が走るというヴァージョンもあります。ホガースはこのような構図の変更を得意としていたのです。おそらくホガース版画のコレクターはこうした別のヴァージョンをも好んで収集したのでしょう。

第5景「トムの結婚」(図26)。破産したトムは債務者用監獄に投獄させられるのを避けるために、お金持ちの老女と結婚しました。妻になる女性は彼とは母親ほどの歳の差があるだけでなく、かなりの醜女として描かれています。とうてい二人が幸福になれそうもありません。というのもトムは教会での結婚式のときから、老女の付き添いの若い娘が気になって、流し目を送っているからです。ホガースはセックスと金銭の取引という、反社会的な結婚の悲劇を警鐘しているのです。またこの教会はロンドンでも悪名高いセント・メアリー・ル・ボンで (改築費が教区委員によって横領される)、かなり荒廃し、このカップルの行く末を暗示しているようです。前景左に仲のよい犬の番がいますが、老犬のブルドックと可愛い犬の組み合わせはトムと老女の結婚をパロディー化しています。まさに16世紀以来の「不釣り合いなカップル」の図像を思わせます。オランダの画家ヘンドリック・ホルツィウスの下絵による一対の版画を見ると、《老女と青年》(図27)、《老人と若い娘》の2カップルが表現されています。前者の版画の銘文では、老女を嫌った若者の言葉としてこう書かれていました。「冷たい尻よ、あっちへ行け。青年は若々しい娘に引きつけられる。ボクはお金の罫にかかりたくない。愛は愛によって甘美になる」。ホガースの描くトムが結婚はしたものの、心まで老妻に捧げたのではなく、その本心はこのオランダの版画が代弁しているようです。

第6景「妻の財産を散財するトム」(図28)。結婚後、さっそくトムは妻のお金でいたい放題の散財をします。つまり賭博場通いをするのですが、つぎつぎと大損してしまいます。

犬の首輪にコヴェント・ガーデンと書かれているので、その近くにあった「ホワイツ・チョコレート・ハウス」というギャンブル場がモデルになったのでしょう。会場には高利貸しが待機しているというのも抜け目がないですね。前景でトムが半狂乱になって絶叫していますが、勢い余って鬢が外れ、滑稽です。実はこの賭博場は1733年5月3日に落雷で火事になったのですが、画面でも天井から煙が噴出し、角燈を持った夜警が客たちに知らせています。ホガースが版画の中で時々、実際にあった事件を描写していますが、この情景もそのよい作例でしょう。放蕩息子の一二代記に当時の話題、それも火災という事故を挿入し、主人公の転落の予告をしているのです。

第7景「トムの牢獄生活」(図29)。ホガースが未だ10歳の頃、破産した父は、5年間もフリート (Fleet) 債務者用監獄に入れられたのです。そこでホガースはその状況をかなり詳細に描いています。ホガースや家族にとっても辛い思い出の日々だったのでしょう。というのもホガースの母は薬の行商人をして生計を立てなければならなかったのです。監獄では借金のため住まいを失った家族がこの場面のように、囚人と一緒に暮らすこともあったのです。妻の財産を蕩尽した挙句、破算したトムは投獄されますが、その側で妻が握りこぶしを突き出し、トムの破滅的な行動に怒りを爆発しています。

背景のベッドの天蓋には仮装用の「イカロスの羽根」が置かれていますが、彼の転落の人生を象徴しています。ギリシャ神話でのイカロスは父の忠告を無視して、太陽に近づきすぎたため、蠟で固めた羽根は太陽の熱で溶けてしまい、彼は海に墜落するのです。

画面に戻りますと、牢室にビールの出前をした少年は酒代を要求しますが、トムにはそれすら支払うゆとりがないのです。当時は債務者用監獄の場合、自由に外部から牢室に出入りできました。トムは一攫千金を狙い、獄中で戯曲を書き、それをコベントガーデン劇場の支配人ジョン・リッチに送ったのです。トムはその劇場でかつて大当たりをした「乞食オペラ」の作者ジョン・ゲイのような大成功を夢みたのでしょう (ホガースは1728年、《乞食オペラ》と題する諷刺的な油彩画を制作しています)。ところがリッチからの返事は「この戯曲は採用できません」という断わり状でした。最後の可能性が失われ、トムは絶望の余り、呆然となっています。サラ・ヤングがかなり大きくなったトムの子供を連れて、訪れますが、劇場からの返事を知って、落胆し、失神してしまいます。同じ牢室には錬金術に夢中の囚人がいますが、その様子からすでに精神の病を患っているようです。

「娼婦一代記」での強制収容所、この債務者用監獄、次の情景である精神病院など、当時、こうした施設の惨状と非人道的な扱いは大きな社会問題になっていました。とりわけ、監獄に対しては1729年、オーグルソープ将軍が議会での調査を要求し、ホガースも同じ年、「下院委員会」と題する調査委員会の習作を描き、この問題を版画でも訴えようとした。このようにホガースが個人的な経験を版画に反映させていることも彼の作品の特色でした。社会問題や時事的な事件への彼の関心はひじょうに高かったのです。

第8景「精神病院でのトム」(図30)。この連作の最終場面は最も悲惨な結末を語っています。トムは借金を背負ったばかりでなく、ついにベドラム精神病院に収容されることになったのです。トムは看守人から足に鎖をつけられ、行動を拘束されます。しかし最後までトムに献身的に寄り添っていたのはかつての下宿屋の娘サラ・ヤングで、彼女はトムの

手を取りながら、あふれる涙をぬぐっています。ほかにも精神を病んだ者たちがたくさんいます。例えば、自分を教皇と思ひ込む者、壁に天球図を書きながら、天文学者気取りの者、中には聖人、王様、仕立屋などと信じるなど、さまざまな患者がいます。この精神病院がひどい環境であることは、亀裂や雨漏りのある壁や天井から推測できます。着飾った二人の婦人が見学にやってきました。二人は扇子の骨越しに男たちの様子をこっそり見えています。当時は、ベドラムでこうした病人を観察するのが、ロンドンっ子の日曜日の楽しみだったらしいですね。

当時の日刊誌『スペクテイター』では女性のための扇子学校があったなどと伝えていますが、扇の研究者である関東学院大学教授山崎稔恵氏は、これは執筆者の単なるアイロニーではないかと推測されています。つまり“扇言葉”という表現があるほど、女性たちが扇の使い方によって相手に何らかの意志表示をしていたのですが、そのような学校はなかったようです。詳細は山崎先生のご著書『気取りへの視線』（関東学院大学出版会）をご参照ください。

4. 《当世風結婚》 Marriage à la Mode (1745年)

第3番目の連作にあたり、ホガースはフランス人で優秀な版画家を探して、油彩画を彫版させています。油彩画の連作の方はロンドンのナショナルギャラリーに常設されていますが、色彩豊かなこの連作はこれまでも増してドラマ性に富み、圧巻です。

ホガースは1743年7月12日に予約申し込み券を発行していますが、今度は《性格と戯画》 Characters and Caricatures (図31) と題されたユニークな構図です。ホガースにとって「戯画」(カリカチュア)は芸術に属さない、単なる歪曲、誇張であると考えています。したがって「性格」こそ、人間の本質に関する分野なのでしょう。この100人の相貌を見ると、ホガースが日頃観察していた人間のさまざまな性格が表現されていて、彼の力量を評価できます。ただし下の欄にある7人の頭部について、コルトーナやラファエッロの人物を Characters とし、ゲッツィ、カラッチ、ダ・ヴィンチの人物を Caricaturas として区別しているため、ホガースの好みがよく分かります。文学でいえば、ホガースは変に歪曲したものは道化であるが、自然に忠実であり、自然の正しい模倣は喜劇である、と述べたフィールドイングの『ジョウゼフ・アンドルーズ』の序文を意識しながら、この申し込み券で自己の絵画論を示唆しています。

第1景「結婚の契約」(図32)。この連作のストーリーは当時のイギリス社会によくある「没落した貴族階級と成金の商家」の子弟同志の結婚をベースにしています。親のエゴイズムで契約結婚をした若夫婦の悲劇の深まりを語っています。スクワンダーフィールド伯爵(スクワンダーは「浪費」の意)が誇る家系図から、一族が12世紀のノルマンディ公ウィリアムにまで遡る大貴族であることが分かります。伯爵のカフスには刺繍、コートには豪華なレースの飾りがあります。結婚の契約に訪れた商人は簡素なコートを着て、ほとんど装飾性はありません。彼は1千ポンドの持参金を支払ったので、途中で中断していた伯爵家の宮殿の新築がすぐに工事開始となったことが、窓越しに見られます。伯爵の子息は大きなリボン髪を髪に結び、ファッショナブルの洋服を身につけていますが、身分の低い商人の娘を軽蔑し、彼女に背を向けています。娘も婚約指輪にハンカチーフを通し、つま

らなさそうです。二人の冷ややかな態度を見た弁護士シルヴァータング（三百代言の意）は立場もわきまえず、娘の機嫌をとっています。しかし弁護士と娘との関係がこの悲劇的なドラマの軸になることはいまだ予想もできません。

この情景での画中画の役割は注目に値します。「ゴリアテを倒すダヴィット」「ホロフェルヌスを殺害するユデット」「聖セバスティアヌスの殉教」(図33)など、殺害や受難といった主題が選ばれているからです。

第2景「怠惰な朝」(図34)。財産と身分との契約結婚をした伯爵家の若夫婦はこれまでのお互いの生活環境がまったく異なっていたため、新婚当時から不和となります。妻は一晚中トランプ遊びに興じ、夫は愛人の許で一夜を過ごし、朝帰りをします。飼犬は主人が奥方とは異なる匂いのナイトキャップをポケットに入れていたので、怪しんだのか吠え立てています。執事は沢山の請求書の束に呆れ顔ですが、領収書はわずか一枚しかありません。つまり支払い能力のない若夫婦の散財生活を暗喩しています。こうして夫婦生活の破綻が始まるのです。壁にかけられた画中画はキリスト教の聖人像ばかりですが、偽善的なクリスチャンの生活を諷刺しているのでしょう。

第3景「藪医者のおフィス」(図35)。若い伯爵とその愛人は医者のところへ抗議に行きます。愛人といっても彼女は若い娼婦らしく、伯爵は彼女の梅毒に感染したようです。藪医者ミソーバンはとてつもなく梅毒という重病を治せなかったため、伯爵は医者に向かって、「この薬は利かない」といつてつき返します。頭蓋骨、鱶や狼の標本、沢山の小引き出しのある薬棚から医者のおフィスの様子がよく分かります。

第4景「伯爵夫人との謁見」(図36)。朝、伯爵夫人がフランス人の美容師に髪を結わせているところに、夫人の取り巻き連中の音楽家たちが訪問しています。イタリア人の人気去勢歌手ファルネルリ、ドイツ人のリュート奏者ヴァイデマンなど、外国人ばかりです。ココアをすすっている男性はプロシア公使で、その髪にはまだカール用のクリップがついたままです。第1景で登場していた弁護士が夫人に接近していますが、仮面舞踏会に誘っているのでしょうか。なんと彼女のサロンには弁護士の肖像画が掛かっています。実際、画面の画中画も伯爵夫人と弁護士の間柄を強調する主題になっています。伯爵夫人の後ろの絵は16世紀イタリアの画家コレッジョの《イオを誘惑するジュピター》(図37)で、主神ジュピターが妻ジュノーの監視を恐れ、雲に変身してイオを抱擁している情景です。弁護士の肖像画の下には同じくコレッジョの《ガニメデスを誘拐するジュピター》が掛かっていますが、驚に変身したジュピターが若くて美少年の羊飼いがニメデスをオリンパスの山にお酌人として連れ去ります。こうしてみると、画中画も伯爵夫人と弁護士の不実な関係を暗喩していることが分かります。

前景に黒人の子供が玩具を前に座っていますが、手にしているのはアクティオンをかたどった人形です。神話上の人物アクティオンは女神アルテミスの水浴をのぞいたため、鹿に変えられてしまいます。彼の頭に鹿の角(コキュ)が生えているので、「妻に寝取られた夫」という意味にもなりますが、伯爵夫人と弁護士の怪しい関係がいつそう示唆されています。

第5景「弁護士に殺害された伯爵」(図38)。伯爵夫人は弁護士と粗末な宿で一夜を過ご

すのですが、前夜、弁護士と彼女は仮装舞踏会に出かけたらしく、部屋には仮面も置かれています。妻の不倫を疑った伯爵は二人の居場所を見つけ、乗り込んでいきました。自分にも愛人がいるのに、妻を激しく責め、弁護士とは一騎打ちになります。しかし伯爵は弁護士の剣に刺さって命を落としてしまいます。パジャマ姿の弁護士は夜警の追跡を恐れ、窓から逃げていきます。妻の方はいまや息を引き取ろうとする夫に膝まづいてその罪をわびています。

第6景「伯爵夫人の自殺」(図39)。弁護士は殺人を犯したので、当然ながら、公開の処刑を受けることとなります。実家に帰された伯爵夫人はその号外を見て、夫も恋人も失うという絶望から、毒薬を飲んで自殺します。ところが守銭奴の父親は平然として死にかかっている娘から高価な指輪を抜いているのです。

前景に乳母に支えられ、母親にお別れをする幼い子供がいますが、伯爵夫妻の子供が実際に登場するのはこの最終景が初めてです。子供は足が悪いらしくサポーターを付けていますが、おそらく父親の梅毒が母親の胎内を通じて、この子供に感染したのでしょう。自分の娘の悲劇的な最後にも動揺しない商人の父親は結局、孫を里子に出してしまうことは容易に推測されます。痩せた犬がテーブルの上の豚の頭を狙っていますが、守銭奴の主人が飼い犬のために十分な餌を与えていないことが分かります。それにしても豚の頭というのは庶民の食べ物ですね。この商人の家のインテリアが非常に質素であることは、シャルダンの台所画や放尿する男などの絵から分かります。現在では、シャルダンは18世紀フランスを代表する静物画や風俗画の巨匠ですが、当時、こうした台所画はごく庶民の趣味と思われていました。貴族が所蔵する絵画の主題はこのシリーズの第1景、第3景の壁に画中画として示されているように、イタリアの巨匠が描いたギリシャ、ローマ神話の主題、聖書からのものでした。

この商人の家の窓からオールド・ロンドン・ブリッジが見えていますが、こうした風景からここが庶民たちの界限ということが分かります。第1景では窓から新築中の宮殿が見え、最終景では庶民の住むテムズ川北岸の家といった対照もホガースによって計算されていたのです。

以上、ホガースは3連作とも不幸な結末を描いています。つまり彼の意図は種々な社会悪、不道德な生活、自分の利益を優先させる親たちのエゴイズムによって、次世代の若者たちがどのような惨めな人生をおくることになるかを警鐘しようとしたのでしょう。

5. 社会世相を描く

《上流階級の趣味》The Taste in High Life (1746年、図40)

この作品ではフランスのファッションに夢中のイギリス人男女、小姓をからかうもう一人の貴婦人などが諷刺されていますが、とりわけ女性の異常に広がったスカートに注目してみましょう。彼女は特別のペティコートを身に着けていることは、画中画で後姿のマネキン人形が語っています。他に円形の画中画でもスカートが広がりすぎて、歩くことに困難な女性の姿が見られます。この版画の依頼者はケンジントンのM.エドワーズ嬢ですが、彼女は自分の服が流行遅れとからかわれたことへの復讐として、ホガースにこうした版画を頼んだのです。滑稽なのは手前に座る、同じく着飾った猿ですが、猿が読み上げている

メニューはフランス語で書かれていました。この猿は幅広いカフス（折り返しのある袖）をつけた紳士のファッションを真似ていますが、彼こそはエドワーズ嬢の復讐相手のポートモア伯を暗喩しているのです。この作品は後の諷刺版画に大きな影響を与え、18世紀後半には過剰ファッションへの様々な揶揄が出回りました（図41）。この版画は目立ちたがり屋の婦人が天井にまで届く、駝鳥の羽根つき鬘をつけているため、天井のローソクの火が鬘に燃え移り、召使いたちが消火に大騒ぎをするという画面です。

《ビール街》《ジン横町》Beer Street and Gin Lane（1750/51年）。この一対の版画はホガースが《南海泡沫事件》とともに、彼が社会的な出来事にもっとも反応した作品です。

《ビール街》（図42）でホガースは市民たちがビールを飲み、日常の生活を健康に営んでいる様子を描いています。

前景でビール腹の肉屋と鍛冶屋が大きなジョッキを手にしながら、のんびりと休憩を取っています。その横に瘦身の御者がトランクを運んでいます。外国人嫌いのホガースはあくせく働く、この神経質なフランス人をイギリス人の肉屋や鍛冶屋と対照的に位置づけてます。すぐ脇の魚売りの娘はジョッキを片手に、「鯨漁場」と題されたバラードを読んでいます。これはホガースの友人ジョン・ロックマンの詩です。町全体は活気づいていて、ビールがどんなに市民から好んで受け入れられたかが分かります。

《ジン横丁》（図43）はスラム街を表わし、《ビール街》とは正反対の情景が見られます。この町角では貧困、絶望、病気、死の気配で充満しています。当時、ジンは安く、今のコンビニで売っているように手軽な飲み物でした。4軒に1軒のお店で入手できたそうです。たとえジンが貧しい階層の人々でも買えるアルコールといっても、飲みすぎると、必ず健康を害します。この画面ではジン中毒による惨状が展開されています。前景では酔いどれの母親が赤ん坊を階段から落としてしまい、真逆さまに落下する赤ん坊の恐怖の表情はすさまじいものです。そばにいる男はがりがりに痩せていますが、おそらく重いアルコール性肝炎で意識がもうろうとしているのでしょう。さらに恐ろしいのは赤ん坊にミルクの代わりにジンを飲ませている母親で、空腹のため泣き叫ぶ赤ん坊をアルコールで黙らせようとしているのでしょうか。破産した大工はノコギリ、主婦は釜を質屋に持って行きますが、質屋の主人に軽くあしらわれています。鴨居から首吊り自殺をするアルコール中毒者もいます。中景では幼い子供を残し、病死した母親が埋葬されていますが、その病気はアルコール中毒であることは間違いないでしょう。

ジンによるアルコール中毒は社会の大問題になり、これをきっかけにやがてジン・アクト（Gin Act）という法律が制定されました。つまりジンの小売りを禁止する法律です。

《エビ売り娘》The Shrimp Girl（1740～5年、図44）は未完成の油彩のスケッチです。その版画は今回の展覧会カタログの表紙になっていますが、版画は1782年、ホガースの死後に発行されました。原画は18世紀というよりは19世紀の印象派の筆法で描かれ、とても近代的です。色彩はオレンジ、グレー、緑などを見事に配色した、時代を先取りするような作品です。漁師の娘は頭の上の籠にエビや貝をいっぱい入れ、輝やくようなほほ笑みを見せています。ホガースは生涯、庶民の日常生活に関心を持ち、彼らの様々な問題点を描いてきました。しかしこの作品はこれまでの諷刺的な眼差とは異なった、愛情にあふれた

ホガースを感じさせます。

まとめ。

ホガースの作品についてまだ沢山、お話ししなければならないのですが、時間の関係で本日は3つの連作を中心に、いくつかの代表作をご紹介します。最後にホガース芸術の特色について、つぎのようにまとめて見たいと思います。

1. **天才的な人間描写。**ホガースは人物の性格や表情の描写にひじょうに優れていました。例えば、《娼婦一代記》の第5景で、二人の藪医者か瀕死のモルの治療よりは薬自慢をしている態度を見て、怒りを爆発する女召使の形相は迫真的です。ホガースは道を歩いても、特別な表情に出会うとすぐに爪の上にスケッチしたり、劇場では役者の表情を熱心に研究していました。

2. **“描かれた道徳”。**1764年に没したホガースの墓碑に彼の友人デヴィッド・ギャリックによる「汝は芸術の最も高貴なる極みに達し、汝により“描かれた道徳”は人の精神を魅了する…」という献詞が刻まれました。まさにホガース芸術の神髄は人間の道徳性のあるときは諷刺的、あるときは教訓的に表現することでした。今日、ご紹介した連作に共通するホガースの意図は道徳的墮落による悲劇的な終末を視覚に訴えることでした。

3. **画中画の活用。**すでに《当世風結婚》の第1景や第4景で説明したように、ホガースは室内の壁によく知られた名画を描き、絵画に教養のある読者を楽しませながら、物語のドラマ性を補佐させていました。ホガースはイタリア、フランドル、フランスなどルネサンスからバロック時代の巨匠たちの作品について自由自在に画中画に適用していますが、彼の美術史上の知識の豊かさにも驚かされます。

4. **外国人嫌い。**ホガースは上流階級でネガティブな役割の人物を描くとき、彼らにフランス・ファッションを装わせています。ホガースは単に外国人を嫌いなのではなく、自国民がイギリスの誇るべき文学や文化をネグレクトしていることを諷刺しているのです。また今日、お話できなかった《絵画戦争》(図45)では、イタリア絵画なら模写や偽作でさえも受け入れるイギリスの画商に激しい嫌悪を表わしています。

5. **社会正義派ホガース。**当時の人びとは新聞や週刊誌などをコーヒー店で読むことができました。ホガースの父もラテン語教師の傍ら、コーヒー店を経営していたので、彼は少年の頃からジャーナリズムには関心がありました。ホガースは新聞などで報じられている社会の悪習や憂うべき現象に対し、《ジン横丁》や連作《選挙》(図46)でも追及の手を休めませんでした。とくに後者の作品で、当時のホイッグ党やトーリー党は票の獲得のためにあくどい賄賂合戦を行ったので、その手口を視覚的に暴露しています。この情景では豪華な供応や現金の手渡しが見られます。

6. **時事問題を主題。**1の内容とも関係しますが、ホガースはとくに時事的な事件を即座に版画化しました。例えば、《サラ・マルコム肖像》で、ホガースは金銭目当てに雇い主の夫人とその友人を殺害したサラ・マルコムの独房を訪れ、彼女の残忍で鋭い眼光の容姿をスケッチし、油彩画や版画を制作しました。ホガースの商魂もたくましいですが、話題の人物を版画化するのが得意だったのです。ちょうど今日のTVでのニュースに近い効果をねらっていたのでしょう。そのほか、様々な場面に当時、起こった事件や実在する場

所などを挿入していました。今日のお話では、放蕩息子の第6景の火事、第8景のペドラム精神病院などがそれです。

7. 虐げられた子供たち。先ほど、司会の白坂先生がご紹介くださいましたが、拙著『子供とカップルの美術史』の「ホガースの“描かれた道徳”と子供観」という章の中で、私はホガースが社会や親から虐げられた不幸な子供たちをどのようにして訴えていたかを論じました。今日の私のお話でも、娼婦モルや伯爵夫人の遺した子供たち、放蕩息子が逮捕されたとき、杖を盗んだり、博打をする少年たちをスライドで紹介しています。彼らは貧しい家庭で放置されているか、ストリートチルドレンたちなのです。「1日の四つの時」の《夜》では、寒い日、ホームレスの子供たちが体を寄せ合って軒下で眠っている情景が描かれています。(図47)。

ホガースがこのような子供たちを救うために様々な援助をしたことは、初めにお話ししましたが、彼の子供たちへの眼差しは画家であり、人道主義者としてのそれでした。

8. ホガース法。ホガースは《娼婦一代記》で剽窃されるという苦い経験をしています。しかも海賊版画はかなり程度が低いので、誤解され、彼の画家としての評判を落とすことになります。《放蕩息子一代記》では、予約申し込みの段階で、すでにコピー版画が横行しました。つまりショーウィンドに展示された油彩画の連作を見て、版画家が原作者ホガースよりも早く、海賊版を制作したのです。ホガースは議会に訴えて、1735年に版画家の著作権を保護する、いわゆるホガース法(Hogarth's Act)の制定に成功させました。この法律は今日の芸術作品のコピーライトのさきがけといえるでしょう。このような社会活動家としてのホガースについても作品からご理解いただけたと思います。

この版画展をご覧になり、皆さまが画家としてのホガースの優れた力量を観賞しながら、物語とその図像の中に18世紀イギリス社会の時代性を“読んで”いただけたら幸いです。長い時間、ご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会 森先生、長時間にわたるご講演と、数々の作品についての解説をいただきまして、本当にありがとうございました。興味深く拝聴させていただきました。先ほど先生のお話もありましたように、広重や北斎に並ぶようなイギリスの版画をここに見る機会をいただきまして、またその画家の研究の第一人者である森先生にご説明していただくということは、なかなかない機会でございます。

今日撤収の関係で3時までしか展示できないというサインが来ましたが、ゆっくり今度はいつ見ることができるか、見る機会を本当に持つことができるかどうか、そして今日のように研究の第一人者に解説をまたお聞きすることができるチャンスはないかもしれないので、この機会にぜひ森先生の解説を頭に入れながらも一度見ていただければ、その当時の社会批判を託した版画作品を鑑賞できるのではないかと思います。

それから今回無理を言って、出品のご許可をいただいた大河内先生にぜひ感謝の気持ちを拍手で表したいと思うのですがいかがでしょうか。このような機会はめったにないものですから、ぜひ盛大な拍手をよろしく願いしたいと思います。(拍手) どうもありがとうございました。

経営学部経営研究所主催によります経営シンポジウム、ホガース版画展。講演会のほう

はここで一応終わりとさせていただきます。ご参加ありがとうございました。3時までは開いておりますので、鑑賞のほど願えればと思います。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

森 洋子氏 講演図版

※印のホガースの銅版画は大河内暁男コレクションによる



※図1 ホガース《自画像》 1748/49年 銅版画

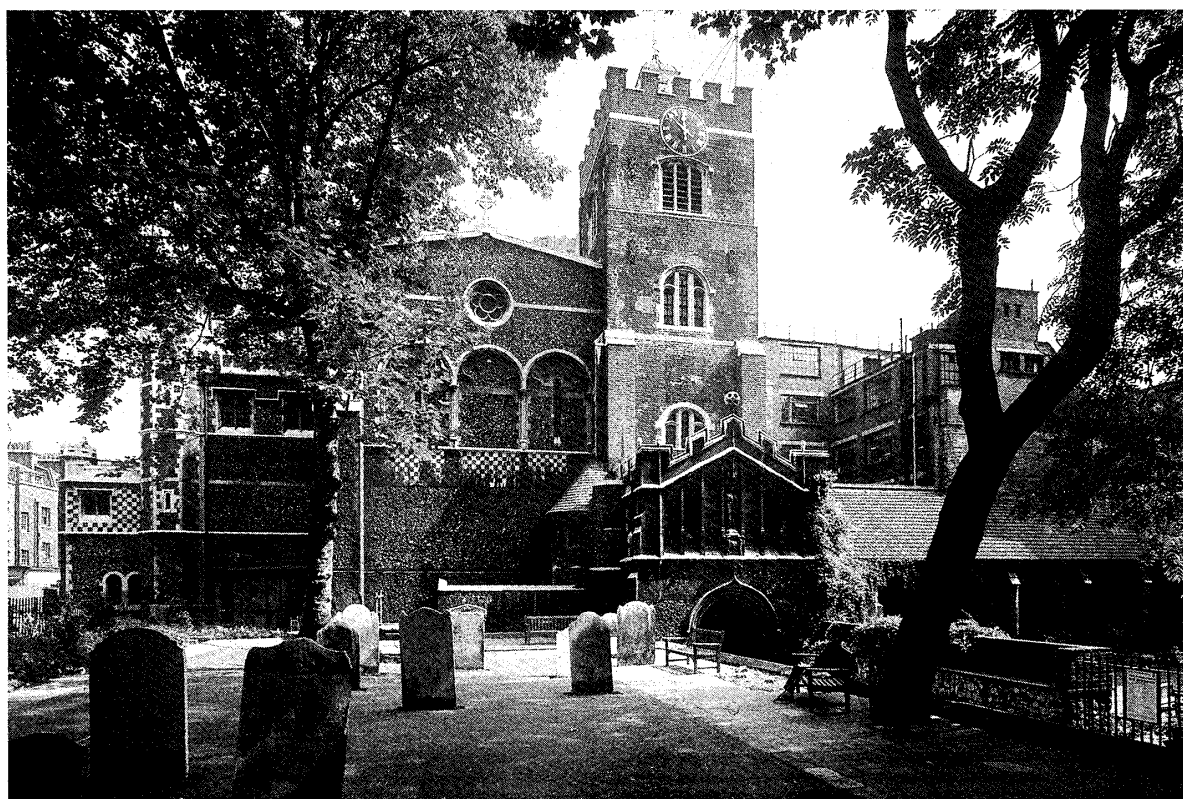


図2 セイント・バーソロミュ・ザ・グレート 1123年頃 ロンドン



図3 リチャード・ウィルソン《ザ・ファウンドリング・ホスピタル》1746年 油彩
ザ・ファウンドリング博物館



図4 ファウンドリング博物館 ロンドン Dr.William Fawcett 撮影

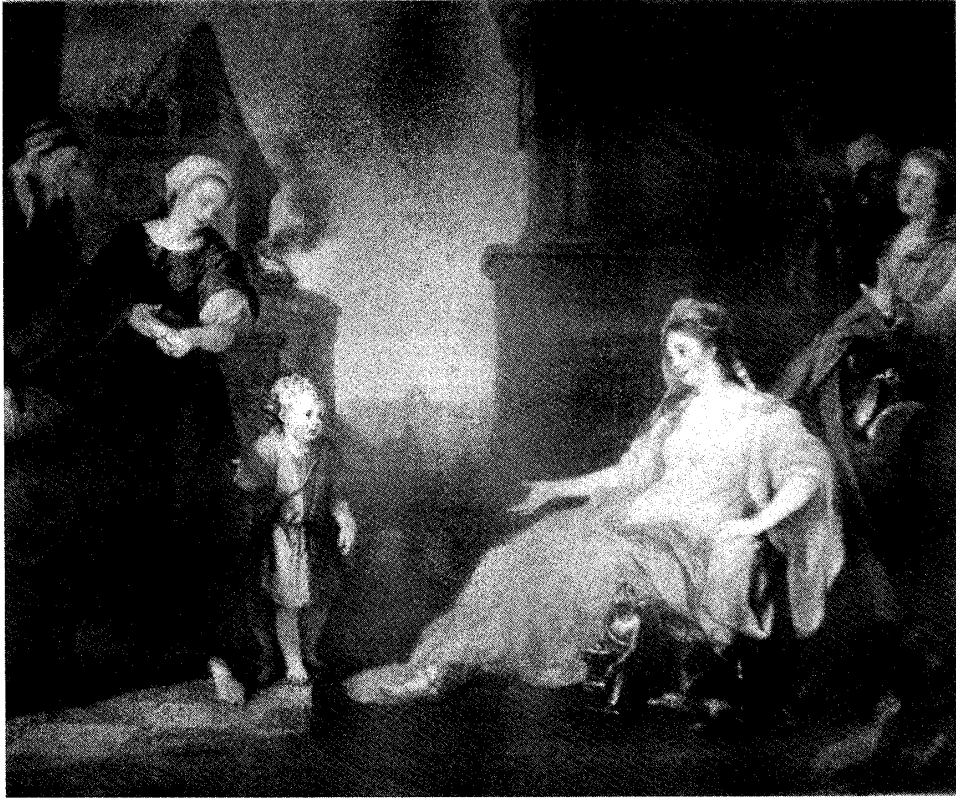


図5 ホガース《ファラオの王女のもとに連れられる幼児モーゼ》1742年 油彩
ロンドン ファウンドリング博物館



図6 チジックのホガースの別荘、現在はホガース・ハウスとして公開。筆者撮影

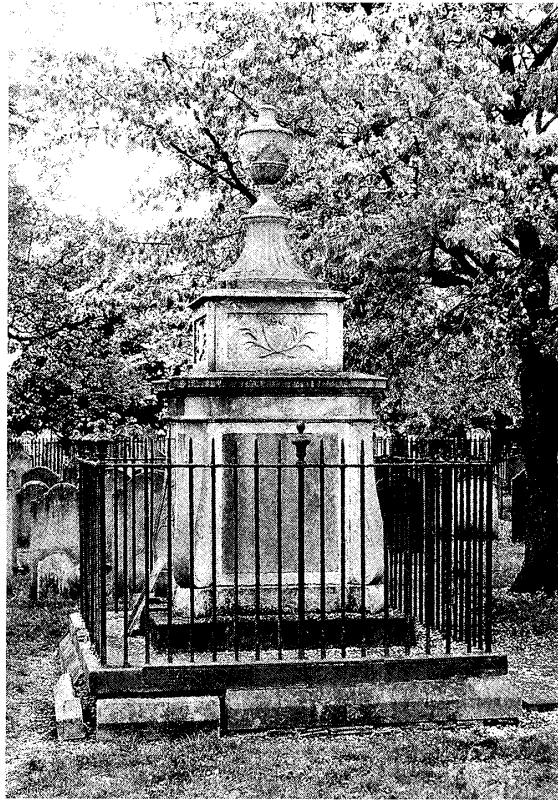


図7 ホガースの墓 セイント・ニコラウス聖堂 チジック
Dr.William Fawcett 撮影

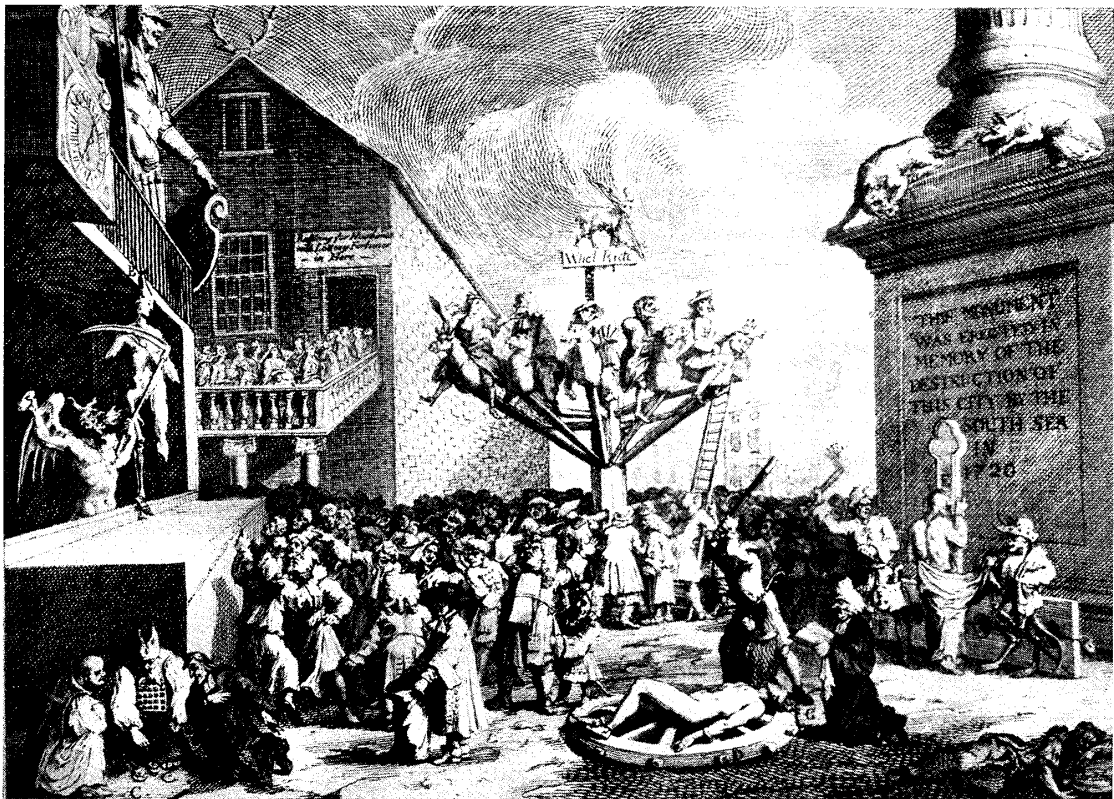


図8 ホガース《南海泡沫事件》1721年 銅版画



図9 ホガース《仮装舞踏会とオペラ》1723/24年 銅版画



図10 ホガース《自然の女神を覗き見する童子（プットー）》1730/31年 銅版画



※図11 ホガース《娼婦一代記》第1景「女衒に騙されるモル」1732年 銅版画



図12 ヘンドリック・ホルツィウス下絵《ご訪問》1593年 銅版画



※ 図13 ホガース《娼婦一代記》第2景「ユダヤ人の愛人となるモル」1732年 銅版画



図14 無名画家による剽窃《娼婦一代記》
第2景「ユダヤ人の愛人となるモル」1732年 銅版画



※図15 ホガース《娼婦一代記》第3景「逮捕されるモル」1732年 銅版画



※図16 ホガース《娼婦一代記》第4景「強制労働の日々」1732年 銅版画



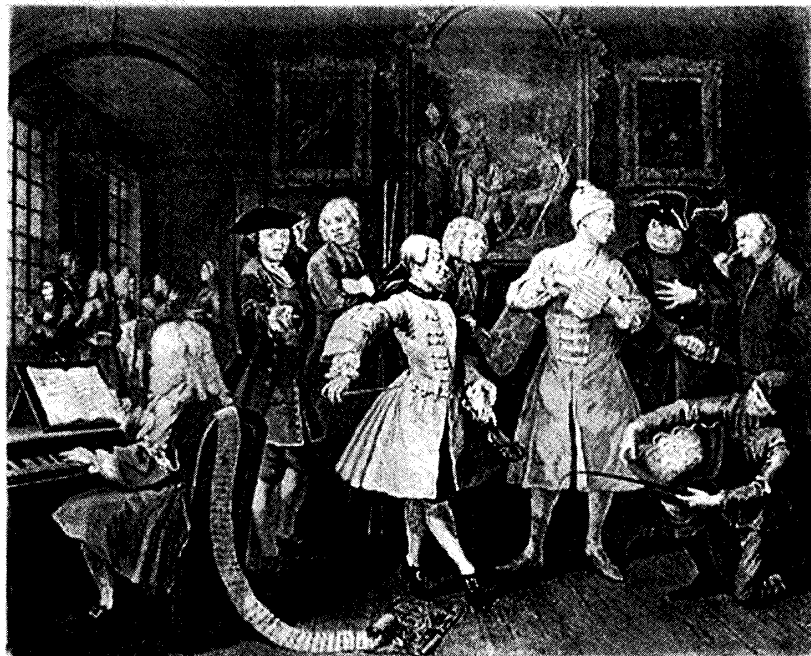
※図17 ホガース《娼婦一代記》第5景「瀕死のモル」1732年 銅版画



※図18 ホガース《娼婦一代記》第6景「モルの葬儀」1732年 銅版画



※図19 ホガース《放蕩息子一代記》第1景「遺産を相続するトム」1735年 銅版画



※図20 ホガース《放蕩息子一代記》第2景「トムの取り巻き連中」1735年 銅版画



※図21 ホガース《放蕩息子一代記》第3景「放蕩するトム」1735年 銅版画



図22 ブラウンシュヴァイクのモノグラム画家《放蕩息子》16世紀前半 油彩
ブラウンシュヴァイク アントン・ウーリッヒ公美術館



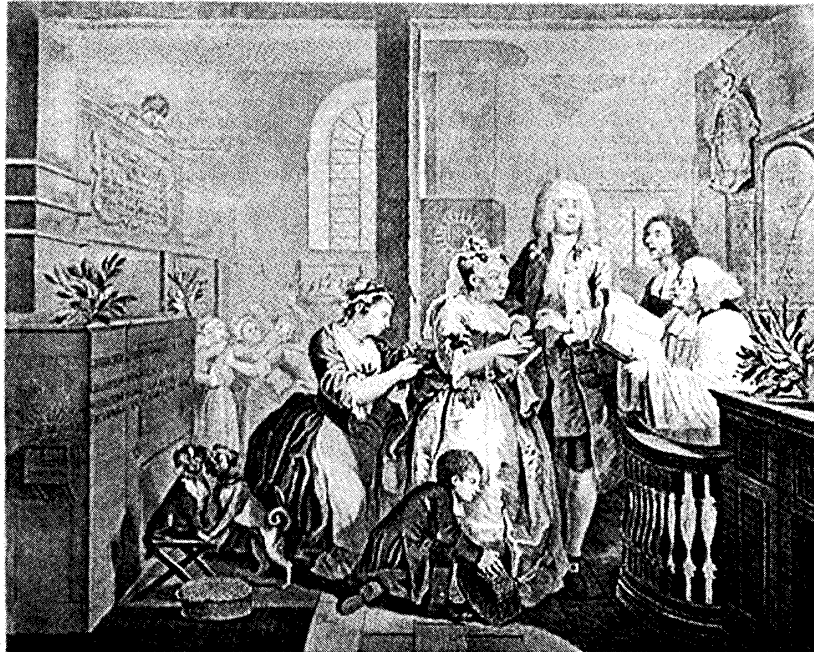
※ 図23 ホガース《放蕩息子一代記》第4景「逮捕されるトム」1735年 銅版画



図24 クロード・ジロ《街角で鉢合わせをする御者》17世紀末 油彩



※図25 ホガース《放蕩息子一代記》「ギャンブルする悪童たち」
(図23の第2ステートの部分) 銅版画



※図26 ホガース《放蕩息子一代記》第5景「トムの結婚」1735年 銅版画



図27 ヘンドリック・ホルツィウス下絵《老女と若者》16世紀末 銅版画



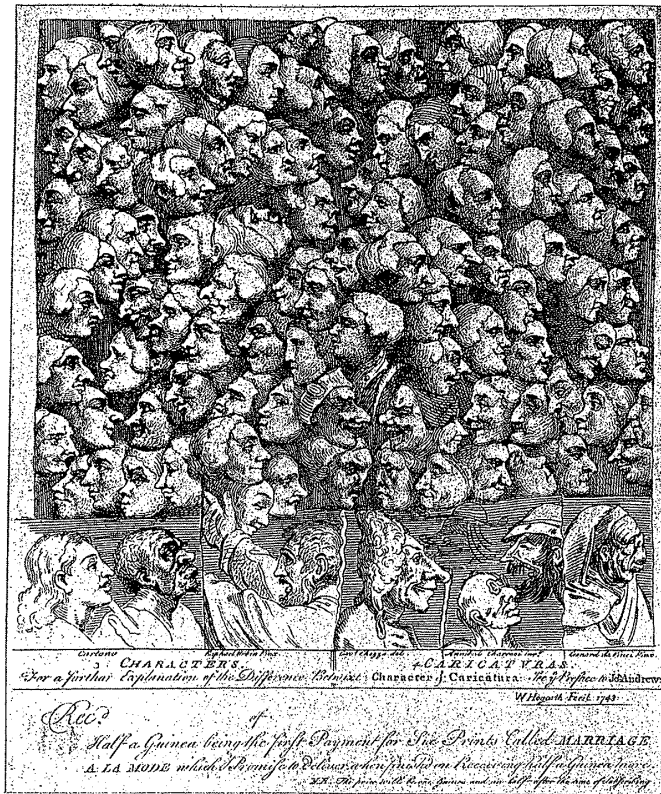
*図28 ホガース《放蕩息子一代記》第6景「妻の財産を散財するトム」1735年 銅版画



※図29 ホガース《放蕩息子一代記》第7景「トムの子獄生活」1735年 銅版画



※図30 ホガース《放蕩息子一代記》第8景「精神病院でのトム」1735年 銅版画



※ 図31 ホガース《性格と戯画》1743年 銅版画



※ 図32 ホガース《当世風結婚》第1景「結婚の契約」1745年 銅版画

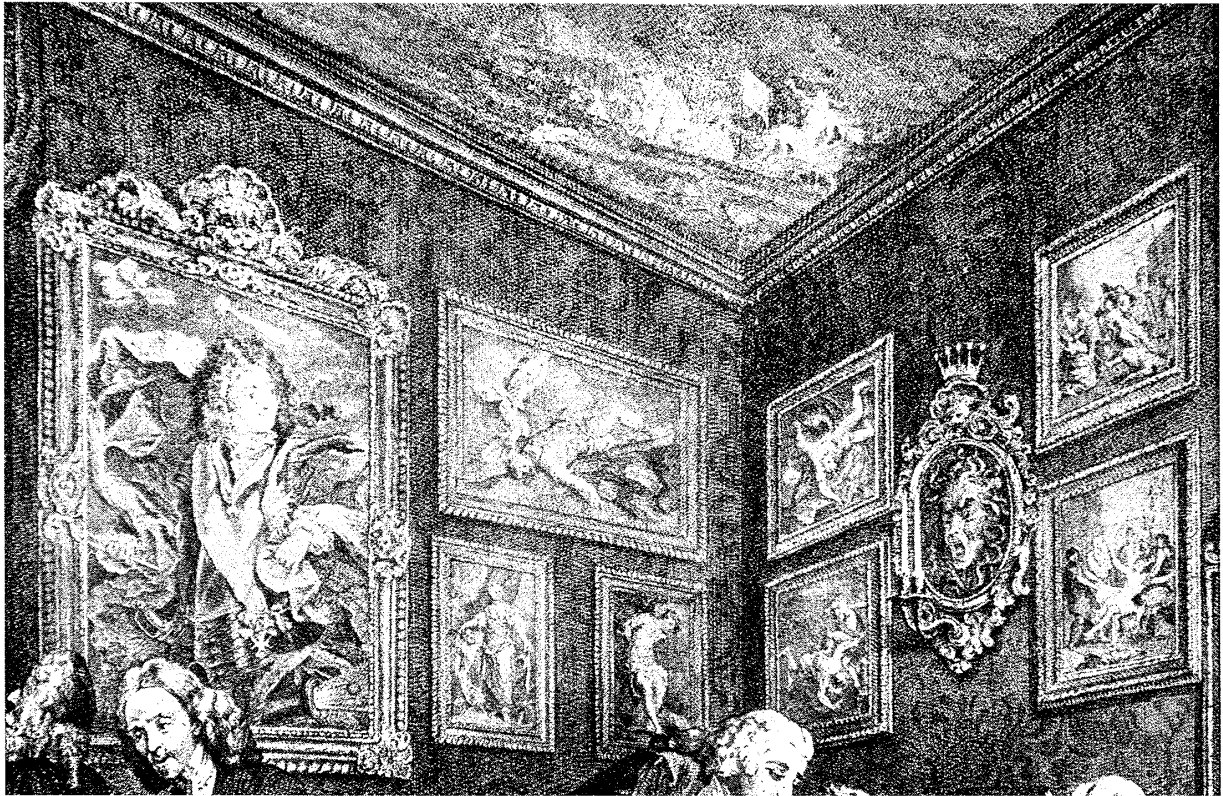


図33 ホガース「コリアテを倒すダヴィット」「ホロフェルヌスを殺害するユデット」「聖セバスティアヌスの殉教」(《当世風結婚》第1景の画中画) 1745年 銅版画



Marriage à la Mode, scene

※図34 ホガース《当世風結婚》第2景「怠惰な朝」 1745年 銅版画



※図35 ホガース《当世風結婚》第3景「藪医者のオフィス」1745年 銅版画



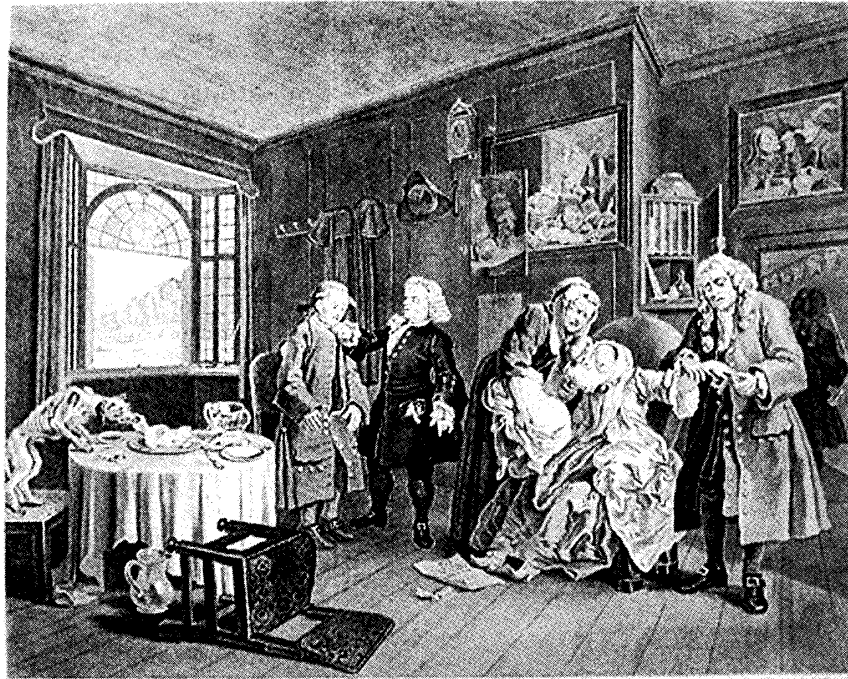
※図36 ホガース《当世風結婚》第4景「伯爵夫人との謁見」1745年 銅版画



図37 コレッジョ 《イオを誘惑するジュピター》1531年頃 油彩
ウィーン 美術史美術館



※図38 ホガース 《当世風結婚》第5景「弁護士に殺害された伯爵」1745年 銅版画



(Marriage à la Mode, Plate VI)

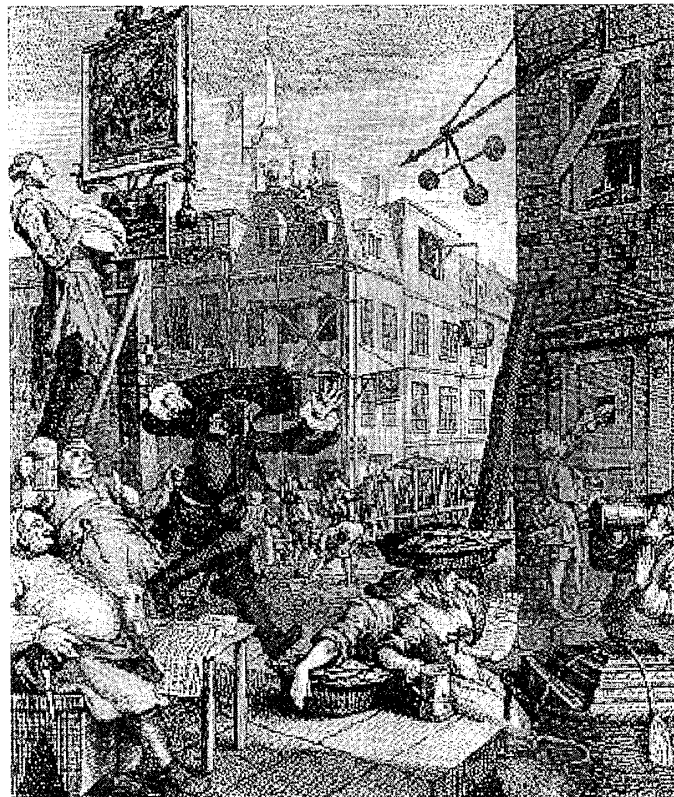
※図39 ホガース《当世風結婚》第6景「伯爵夫人の自殺」1745年 銅版画



図40 ホガース《上流階級の趣味》1746年 銅版画



図41 作者不詳《ご婦人たちよ、頭にご用心》1776年 銅版画



*図42 ホガース《ビール街》1750/1751年 銅版画



※ 図43 ホガース 《ジン横町》 1750/51年 銅版画



図44 ホガース 《エビ売り娘》 1740～45年頃 油彩
ロンドン ナショナル・ギャラリー

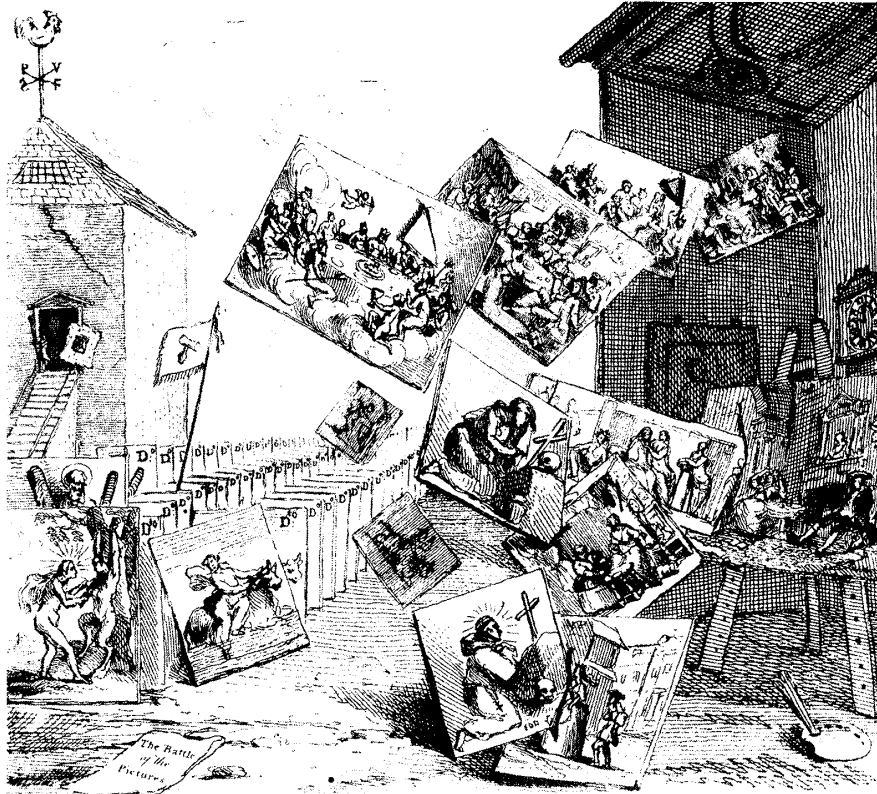


図45 ホガース《絵画戦争》1744/45年 銅版画



※図46 ホガース《選挙での饗宴》(《選挙》の第1景) 1755/58年 銅版画



* 図47 ホガース《夜》(《1日の四つの時》の第4景) 1738年 銅版画